

各地で話題の病虫害

フタテンミドリヒメヨコバイ

学名: *Amrasca biguttula* (ISHIDA, 1913)

2005年2月頃から父島内都道沿いの植栽ハイビスカスの葉に黄化萎縮症状が確認され、6月には、小笠原亜熱帯農業センター内のオクラの葉が上向きにカールし、生育が鈍化する症状が確認された。これらの症状を呈したハイビスカスやオクラなどには多数のヨコバイ類の寄生が確認され、その後、フタテンミドリヒメヨコバイであることが判明した。その後の調査では、父島・母島内の植栽ハイビスカスのほぼ全てで本種の発生が確認され、栽培オクラ、栽培ナスにおいても発生が確認された。

本種は、国外では台湾、中国、インドなどに分布し、オクラ、ハイビスカス、ナスのほかワタ、ジャガイモ、トマトの害虫とされている。国内では奄美大島、沖縄本島、来間島(宮古諸島)、本州で記録があり、小笠原諸島には2002年以降に侵入した可能性が高いとされている。



オクラの被害状況



成虫

幼虫・成虫とも新葉や茎から吸汁し、本種に吸汁された葉は上向きにカールし、赤褐色となって枯死する。成虫は体長2.7～3.2mm。頭胸部は黄緑色で、翅の末端近くに一对の黒点がある。終齢幼虫は体長2.4～3.2mm。全身がほぼ黄緑色で、翅芽(翅の原基)に一对の黒点がある。本種は年間で7世代発生するとされており、沖縄での発生は5～10月で、特に7～8月にかけて多発する。

防除対策としては、未発生地域へ本種が侵入しないよう、苗の移動に注意するとともに、施設栽培などでは2mm目以下の防虫ネットを設置することが有効である。多発すると被害葉は黄変萎縮するので、葉裏を観察し、早期発見・早期防除に努めることが重要である。

写真提供: 東京都小笠原亜熱帯農業センター 小野 剛 氏

ピーマンなどに発生した黒枯病

病原菌: *Corynespora cassiicola* (Berk. & Curt.) Wei

英名: *Corynespora leaf spot*

2004年1月、高知県の施設栽培ピーマン、シシトウガラシに斑点性及び枝枯性の障害が発生し、高知県農業技術センターで調査した結果、*Corynespora cassiicola* (Berk. & Curt.) Weiによる新しい病害であることが判明した。その後、同年10月には宮崎県の促成栽培ピーマン、12月には鹿児島県の施設栽培ピーマンでも本病害が確認された。本菌によるピーマン、シシトウガラシの病害は、これまでわが国では未報告であった。



本菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属し、分生子は長い棍棒状で分生子柄の先端から単生もしくは連生する。分離菌の分生子の大きさは平均 $197.1 \times 10.3 \mu\text{m}$ で平均12.5個の横偽隔壁が認められる。

本病の病徴は、葉では初め褐色小斑点が形成され、次第に葉脈に沿って拡大し、黒褐色輪紋状の不定形の病斑となり、葉が萎縮するような症状がみられる。病斑は黄色のハローを伴うことが多い。茎では黒褐色の斑点が形成され、しばしば黒色ビロート状の菌叢が認められる。また、果実、果梗にも黒褐色の斑点を生じることがある。

生態や伝染経路の詳細は不明であるが、被害茎葉上に形成される分生子により伝染し、高温多湿条件下で多発する。

本病の防除対策としては、ほ場内が多湿にならないよう排水を良好にし、敷きワラ、マルチなどを行う。発病茎葉、果実は伝染源になるので、ほ場外に持ち出して適切に処分する。



写真提供: 鹿児島県農業総合開発センター生産環境部
: 宮崎県病虫害防除・肥料検査センター